

# 明治初期日本人のパリ・コミュン観

## On the view on “Commune de Paris” in early Meiji period

戸田 文明  
Fumiaki TODA

### 要旨

渡六之助著『巴里籠城日誌』、西園寺公望の書簡・自伝草稿、『特命全権大使 米欧回覧実記』により、明治初期日本人のパリ・コミュン観を検討し、同時に彼らの西欧文明観・民衆観を検討する。

キーワード：パリ・コミュン 普仏戦争 西園寺公望 渡六之助 『巴里籠城日誌』  
岩倉使節団 『米欧回覧実記』

### はじめに

19世紀後半において、日本は、開国・明治維新と大きな変革を体験した。同時期、アメリカの南北戦争、普仏戦争とドイツ帝国の成立、イタリア統一など、西欧社会もまた大きな変革を体験している。世界の最新文明と認識されていた西欧社会が理想社会ではないことは早くから認識されていたが、西欧国家の動揺は、改めてそのことを意識させることとなり、遅れて近代化を進めようとしていた日本に大きな影響を与えたことは疑いない。ことに、最強国のひとつと認識されていたフランスとプロシアの戦い、それにつづくパリ・コミュンの成立と内戦、パリ・コミュンの崩壊は大きな関心を呼んだ。現代の目から見ても、普仏戦争は、国家・政府間の戦争から国民戦争へと、戦争の歴史の中でも画期をなすものであり、またそれに続くパリ・コミュンは新たな政治形態の実験としての意味を持っていた。

渡六之助（正元）、西園寺公望、岩倉使節団の残した史料をもとに、明治初期の日本人のパリ・コミュン観を検討し、同時に彼らの西欧文明観・民衆観を考えるものである。

### 一 渡六之助『巴里籠城日誌』（『法普戦争誌略』）に見るパリ攻囲下の民衆

渡六之助（正元）は、1869年渡英、その後70年に渡仏している。幕末から仏学を学び、十分なフランス語能力を持っていたようである。71年5月には、陸軍兵学寮出仕となり、国費留学生として1874年までサン・シール陸軍士官学校で学ぶこととなりパリを離れている。当時のフランスの事情に精通していた人物であるといえよう。

普仏戦争当時、フランスへの私費留学生としてパリに滞在していた渡六之助は、1870年7月11日から71年3月9日（休戦条約締結）まで、約8ヶ月間にわたって記録したパリでの見聞

と新聞等の抄録をもとに『法普戦争誌略』を著している。『法普戦争誌略』は、パリ開城の日に、日本政府からプロシアに派遣された軍事視察団（大山彌助、品川彌次郎、林有造、池田彌一）に托して、日本に送られ（軍事使節団は、太政官への報告書の代りにしたという）、同年に太政官から出版されている。その後、第一次世界大戦勃発に際し、『巴里籠城日誌』（以下『籠城日誌』）として再刊されている<sup>1)</sup>。

『籠城日誌』には、コミュン政府成立以前に終わっており（先述したように、71年5月に渡はパリを離れている）コミュンそのものについての叙述はないが、その成立の背景を詳述しており、渡が自らの体験を、西園寺や岩倉使節団に対してレクチャーしたことも疑いのないところである。先述のように、岩倉使節団到着後、渡が陸軍省出仕となっているのは、おそらく、『法普戦争誌略』の出版と岩倉使節団への対応に対する評価のあらわれといえよう。渡の体験と観察が西園寺や岩倉使節団のコミュン観に大きな影響を与えていることはいうまでもない。

『籠城日誌』は、普仏戦争勃発に至る過程から筆を起し、戦況の変化とプロシア軍包囲下のパリの状況について、実際の見聞（パリの町に出たの実際の見聞・帝制廃止後「共和政堂」の置かれたオテルドビルにも出かけ、傍聴することもあった。また、知り合いの陸軍中佐などを通しての情報収集もおこなっている）や新聞、壁書された「布令」などにもとづき、渡の感想を交えながら、詳しく記録している。プロシア軍攻囲下のパリの状況を伝える貴重な記録であるといえよう。

本節では、『籠城日誌』により、プロシア軍攻囲下のパリの民衆の動向を検討する。

渡は、フランス敗戦の原因を次のようにまとめている。

一夕、余独り仏兵敗軍の事跡を妄誌して曰く、仏兵五の失あり。

人和を得ずして其軍を擡まゝにす。一失なり。

敵を侮つて其兵傲る。二失也。

将帥の選挙を誤りて、其令良からず。三失也。

兵の成算を失して嗣ぐに兵・器俱に乏し。四失也。

間諜を用ひずして、敵の機を察すること能はず。五失なり。（『籠城日誌』、280～281頁）

二失、三失、四失は戦争指揮に関わる問題であり、ここでは検討しない。一失は、フランス、殊にパリの政情と民衆の動向に関わる問題である。五失は戦争指揮の問題ではあるが、政府の情報公開という点で民衆の動向に関わってくる。ここでは、一失と五失を中心に検討する。

渡は一失について、「仏国人民の制馭し難きことは古来より能く人の知る処なり。是人民常に廟堂を蔑視し、草莽激動して屢々其国体を変換する宿弊あればなり。（中略）唯豪爽智勇の一王出でて府内を足下に踏み、全国を掌握するに非ずんば、駕御して一日も其全国を保育す可からず」とする（『籠城日誌』、283頁）。「草莽」の「激動」、即ちパリ民衆の動静や運動が「国体」変革の要因となっているというのである。それ故、『籠城日誌』はパリ民衆の動向をしばしば詳しく伝えている。

例えば、戦争中にもかかわらず、民衆の動向によって政府閣員が交代することがあった。70

年8月9日、「ガルド・ナショナル（市兵）取立」の問題で集議院が混乱し、「今日集議院の外圍並に其前の橋上、数万人集議し、評議如何を聞かむとす。その紛混云ふべからず」という状況のもとで、大臣が更迭される。渡は、「按ずるに、この黜陟、元と府内人民沸騰逼迫に本づく者歟。蓋し仏国の人民、その国体に関係する斯の如し。欧州の中、国民の制御の難き、殊に仏を首とすと云ふ」という（『籠城日誌』、20頁）。民衆の動向が政治を左右しているのである。

また、9月2日の記事にはナポレオン三世に対するパリ市民の感情が記されている。

パリ人がナポレオン三世を非常に憎み罵っているという事実を知った渡が、同宿者でもあり親交のあった「去る八月六日の戦ひに、其太股に弾丸を受け、治療の為め帰府」していた「リユーテナン・コロネル（歩兵中佐）レスヒオー氏」に、このことを質したところ、「那破倫巴里府に帰りなば直に衆の為に必ず弑害せらるべし。其故は今度の戦争素より帝の方寸に出で、廟算を失ひ、軍敗れ、人多く死せり。其上本府に敵軍迫りて仏国危急の機に至るは全く帝の所為にして、衆の深く恨むる所也。故に今帝再び帰城せば殆ど弑せられざるを得ず。（中略）今仏全国の恨み已に彼に帰したり、救ふ可からず」との答えを得たという（『籠城日誌』、50頁）<sup>2)</sup>。

さらに、共和制への移行についても、

市街に出づるに、道路数百の群党共和政と記したる大旗を押し立て、大音に共和政となりたる祝歌を唱ひ、帝を棄てたる事を祝し行歩せり。就中尤も甚しきは、方今編成の市兵隊市中を巡邏するに、中には一二小隊は手銃の先きに木葉或は草花を付け、同音に謡ひ横行す。其意憐むべし、亦笑ふべし。又一の奇事を観る。巴里府市中は家毎に国帝の顔面容貌を金地にて造り、之を門飾として其門に懸けたり。然るに今日俄に之を悉く破碎し、微塵となし、諸民同音に笑賀せり。其勢ひ斯の如し。又道路通行の者皆共和政を賀し、相俱に悦び競ふ声、実に戸に溢れ、衢に満ち、殆ど街市を動かせり。人心の乖離斯の如し。又其所為を見るに狂人に異ならず。他より之を視る時は其人民の状態所為実に憎むべし。

（『籠城日誌』56頁）

帝政時代とは手の裏を返したよう、共和制を喜ぶ民衆の姿を狂人と評し、また「人民の状態所為実に憎むべし」と非難している。では、なぜこのような状況に至ったのか。

余竊<sup>ひそか</sup>に惟ふに、今欧羅巴各国、就中、英仏普の三国に於ては文明開化強富の盛んなる恐らくは今日宇内の魁と謂つべし。然も其事情状態を観察するに、其人心疎闊輕薄にして、節義なるものは全く無きに近し。我が日本の魂を以て視るときは、若し国帝敵の虜となるときは全国民人憤激し、其身を忘れ仇を報ぜむ。然るに人心の開化究まる時は、其節義に疎き斯の如きに至る。惟ふに是れ随つて生ずるの弊ならむ。今や欧羅巴各国の開化実に遺漏なしと雖も、敢て嘆ずべきは只此節義を養成し得ざるの弊害なり。而して我が本邦にて最も貴ぶべきものは他なし、只此節義のみ。人心開化の地に限り人心輕浮にして節義に疎きは、万邦皆同じ。嗟、其国に教を立つるもの宜しく爰に注意せずんばある可からず

（『籠城日誌』、57頁）

西欧の文明は、非常に進んでいるとはいえ、「節義（節義の内実は、国帝に対する忠節、ということになろう）を養成」することができなかつたという点で失敗している、しかもそれは、「人心開化の地に限り人心輕浮にして節義に疎きは、万邦皆同じ」と文明の開化の結果どこでも

起りうることであると認識されている。とすれば、日本の開化の方向はどのようになるであろうか。忠君愛国という「伝統的」道徳を温存しつつ、新しい文明を導入するという、佐久間象山の「西洋芸術、東洋道徳」という採長補短のあり方ということにならうが、更に、その道徳の意味は狭められることにならう。

さて、共和制への移行を喜び、街頭での示威をおこなう民衆はさらに政治の動向を左右する。

メッツ要塞陥落の報に接した民衆は、「今朝未明より巴里府各街市兵隊呼出しの太鼓を打鳴らし、午前には諸部の市兵集合し、十一時より隊列を組み、市兵数万潮の湧くが如く政事堂オテルドヒル館に向つて馳せ集り、其周囲に群集し、四方の道路を取り塞ぎて最も騒擾せり。何故ならむと尋ぬるに、此程籠城防戦中政府の威権行はれず件々其宜きを得ざるを以て市兵激動し、再び政府の官員を一変し新たに選挙せむ事を謀り、一統競ひ起りて、政府に迫りしもの也と。其群集数十万敢へて目算すべからず。直に其市街督出張して、此群中に説諭し、取り鎮めむとすれども、混乱甚しく言語も通ずること能はず。」(『籠城日誌』、119頁) というように、「政府官員」の一新まで迫るのである。その結果、「人心の向背公開の爲め投票を爲し、其多寡点検の上、政府の改革を裁断すべし」と政府閣員に対する信任投票が実施されることになる。渡は、こうした民衆の政治への関与を「この形勢巴里府城外に迫れる普軍を防ぐよりも最も難し。」(『籠城日誌』、122頁) と評する。渡にとっては、パリへの進軍を始めつつあるプロシア軍という国家的脅威をよそに、信任投票による政府改革を政府に迫る民衆の姿は常軌を逸していると映ったことであろう。

一方、プロシア軍攻囲下のパリ市民はどのような生活をしていたであろうか。食糧不足の影響を受けながらも、

(コンセルバトワールの博物館からの) 帰路市街に過り、其状態を観るに、今日日曜日なるを以て途上散歩遊行の人殊に多し。又屈竟の男女等美服を着し、其妻女の手を携へ、徐々として逍遙するもの幾千人なるを知らず。此輩皆今仏国殆んど敵の掌中に陥らむとし、危急存亡旦夕に逼り、其危き実に朝露の如くなるを知らざるものに似たり。巴里府人は虚飾を専らとし、言語を巧みにして、内に報国の赤心なく、常に国事を罵れども、危急に<sup>のぞ</sup>んで其国を顧みざるが如し。其薄節、又我徒の眼目を驚愕せしむる也。惟ふに今仏国の兵器機関は精好にして実に善美を極むと雖も、廟堂に人材なく、草莽に節義なく、威武傾頽して梟敵に当るべき正気なし、嗟々国夫れ奇器ありと雖も、人材なければ亦是を何奈ともすること能はざるのみ

(11月26日。『籠城日誌』、151頁)

国家の非常時に普段と変わりなく散歩逍遙する享樂的なパリ市民の姿は、政府批判はするが、「国を顧み」ない、節義の薄い、「敵に当るべき正気のない」、いわばどうしようもない存在として描かれている。

また、政治的分裂状況については、

○余仏国の事情を察するに、全州の人民其党今四派に分る。	
レピュブリケーレ	共和制度を助くるの派
ボナパルチスト	那破倫家を助くるの派
オルレアニスト	<sup>オルレアン</sup> 王爾噠侯を助くるの派

レジチミスト

仏国古代の王胤を立てむとするの派

今此四派の党全国に並び競うて、勢ひ相制駁すべからざるもの、如し。〔『籠城日誌』、268頁〕  
と四派が対立抗争している状況、中でも共和派の勢力が強かったが、「然れども方今の形勢を視るに、巴里府内の人民は共和制度の徒最も多くして、又之を助けむとするもの少からず。但し其全国諸府県の如きは、猶那破倫家の派及王爾噠侯家の派尤も衆くして相競ひ、四派の勢更に制す可からざるに至れり。」〔『籠城日誌』、269頁〕

パリ並びに大都市における共和派の優勢、逆に地方においては、ナポレオン派とオルレアン派の勢力が強いことが的確にとらえられている。パリと地方の間には政治意識において大きな差が存在していたのである。パリ・コミュニケーションとヴェルサイユ政府の対立の大きな背景がここにあるといってもよからう。節義のない民衆が各党派に別れて対立し、国家的統一が為されていない状況こそが、フランスの最大の敗因ということにならうか。

次に「五失」としてあげられている「間諜」についてみてみよう。

まず、フランスが敵情を知るために間諜を使わなかったことが「失」であると批判される。逆に、フランス軍の動きについては、「普く府内公開」するため情報は間諜を通じてプロシア軍に即座に伝えられているという。パリ市民に対してはすでに早くから情報公開が為されていたが、8月になると「ブルースと云ふ」「相場会所のごときものに」張出されたデマ（これもプロシアの間諜が意図的に流したデマである可能性がある）をきっかけに、パリ市民が動揺し「騷擾一方ならず」という状況に至った。激昂したパリ市民3000人がパリの施政権をにぎる内政全権宰相オリビエー氏の「門下に蟻附し」、同日8月6日の夕刻には、「自今、新聞報告を得ば、事件の細大に係らず、直ちに布告すべき」との布告が出されている。そして、七日には、「是迄政府得る所の新聞報知、毫も之を秘することなく布告し来たれり。此後弥々引続き普く国中に公開すべき也」と布告し、軍情を公開している。このあとも、戦地からの報告を市民に公示している。ここでも、民衆が政治を動かしているのである（『籠城日誌』、9頁）。

情報公開・共有は、民主主義の基礎とも云えるが、戦時下での情報公開は、渡のいうように、敵に軍事機密を漏らすことにもなりかねない。渡ならずとも危惧せざるを得ない。まして、密室政治のもとで宮廷内クーデターとして遂行された明治維新しか経験していない立場からいえば、こうした状況は愚昧な民衆の無茶な要求を拒否できない政府の問題であると同時に、自分たちの勝手な要求を通すために政府を暴力で脅かす民衆に対する嫌悪と恐怖感を増幅させたといえようか。

そして、実際に以後すべての情報とはいえないであろうが、戦場からの報告は市民に公表されることになる。ここでも、渡はパリの民衆の動きが情報公開を徹底させたと見ている。

渡の目には、フランス（パリ）の市民は、次のように映っている。

○余常に嘆ず、仏国の人民は、其心傲慢にして上を恐れず官を憚らず、恣まゝに其政体を誹謗し、其廟堂を軽蔑する其習慣常に巴里府の風俗也。而して彼等其寸舌の才を逞しうして以てたやす輒く国事をろうぼ哂罵すと雖も、固より出でて枢機に当る可からず、徒に市民を鼓動し、ややも動すれば激動して其政府を变革せむとす。故に其柄権概ね下民に在つて而して廟堂深く下民を恐る。尤も正路の奥秘爰にこ抛らずんばある可からざれども、其民に主たるの威厳主権

もと固より其主宰たり。惟ふに仏国の如きは勢ひ那破倫の如き帝王上に在つて、自ら府内を踵下に踏み、全州を一つに掌握するに非ずんば得て之を制馭すべからず。迨も此傲慢の人民上に合衆共和の制度は永く行はるべからず。曩に其国体変革共和制度を建つるの後、余等漸次竊に此巴里府総裁職大統領ドロシユ氏及其他共和政堂各員諸職の進退挙動を視るに、其処置常に府内の人民に媚びるの色ありて、今仏国危急存亡の期に至ると雖も、猶只其人心を宥め安んじて、竊に其衝動を禦ぎ、廟算を進伸し難し。爰に於て草莽の見識常に廟堂の上に進み、新聞会社の著述者すら、其大言傲慢又此局に至る。況や有識の人をや。而して今日其国家荒廢の日に至つて廟堂と草莽との間其情実概ね斯の如し。其国事の狀態得て察すべし。今余其秃筆を贅して努めて前章を抄訳す。是即ち他日事情を顧索するの参閱に便せむが為也  
(『籠城日誌』、196～197頁)

渡は、パリの政情を、上を恐れず、官を憚らない煽動された下層の民衆が柄権をもち、政治は、これら民衆に媚び「人心を宥め安んじ」ることにのみ意を用いることが目的化しているという憂うべき状況である、と考えているといえよう。しかもその民衆は一方で文明を享受しながら、他方国への忠誠心も節義もない享樂的で無責任な存在である。こうしたパリの下層民の動向がパリ・コミューンの成立につながっていると渡は考えたであろう。

こうした渡のパリ民衆像は、次に述べる西園寺公望の民衆観、パリ・コミューン観に受け継がれる。というよりも、尊攘派公家として戊辰戦争を戦った経験を背景にさらに極端なものとなる。

## 二 西園寺公望のパリ・コミューン観

渡の『籠城日誌』は、パリ・コミューンそのものについては叙述していない。パリ・コミューンを直接体験し、記録を残しているのは西園寺公望である。『西園寺公望伝 第一巻』(1990年、岩波書店)『西園寺公望伝 別巻一・二』(1996年・1997年、岩波書店)に依つて西園寺の民衆観・コミューン観を検討しよう。

西園寺公望は、1871年にパリに到着し、以後10年近くにわたつてフランスに留学している。彼が到着した3月26日(明治4年2月6日)<sup>3)</sup>はコミューン議会の選挙がおこなわれた日であり、28日には、パリ市庁前広場でパリ・コミューンの成立が宣言される。まさに、パリ・コミューン成立からその終焉まで、西園寺はパリ・コミューン支配下のパリを実体験したといえよう。例えば、西園寺の「自伝草稿 I・II」には、次のような記述がある。

三月二十八日

余、巴黎城中ノ一学校ニ在リ、夕第六字頃、前田弘安、及米人ヲゼダ、ト共ニ、夕食ス、聞得タリ、一声ノ轟雷、天地ニ響テ震ス、玻璃窓、為ニ碎ケ、障屏、皆倒ル、余、前及ヲゼダト、急ニ身ヲ抜テ中庭ニ出ツ、只見ル、一塊ノ白雲、西南方ニ、立ち昇リ、中ニ黒氣有リ、且電光ノ如キ者、四射シ、夕陽ト相映ズ、漸々延漫シ、中天ヲ裏ム、皆曰ク、是火薬坑ノ暴発スルナリト、余等、学校ノ長ニ乞ヒ、一教員ト共ニ、其地ニ走ス、然レドモ、ポリス制シテ、坑辺ニ行ヲ許サズ、蓋シ、余薬ノ更ニ、発センコトヲ恐ル、ナリ、今日之ガ為ニ死ス者、三十余人ト云ヘリ、  
(「自伝草稿 I」『西園寺公望伝 別巻二』7頁)

3月28日とあるのは、西暦の5月17日にあたる。この日、ラップ並木街で弾薬庫が大爆発している。西園寺の記事はこの爆発を指すのであろう。ヴェルサイユ軍がパリに侵入する数日前にあたることから、ヴェルサイユ軍の破壊工作であるとも考えられるが、西園寺自身が直接体験し、「其地ニ走」りさえている。青年客気という面もあろうが、戊辰戦争を経験した西園寺（戊辰戦争では、山陰道鎮撫総督、東山道第二軍総督、北国鎮撫使、会津征討越後口大参謀として転戦している）が、コミューンの動乱に大きな関心を持っていたことは明らかであろう。しかし、この事例以外、コミューンについての具体的な記録はほとんど見られない。コミューン壊滅の「血の週間」についても、西園寺は、「目を刮て傍観いたし候」というように「刮目」してはいるがあくまで「傍観者」であった。おそらく、コミューンの動乱に対する関心は強かったものの、コミューン壊滅までの3ヶ月近く、「パリ城中ノ一学校」で、コミューンについての噂を聞きながら、フランス語習得を中心に勉学に励んでいたというのが実情であろう。その意味では、同時期にパリに在住しながら、西園寺のコミューン体験は間接的な部分が大きいといえるかもしれない。

では、自らの体験と伝聞等による情報をもとに西園寺はコミューンをどのように評価したであろうか。

西園寺のコミューン評価は、橋本実梁宛書翰（立命館大学編『西園寺公望伝 別巻一』）や前掲の「自伝草稿Ⅰ・Ⅱ」（『西園寺公望伝 別巻二』）に記されている。

まず、実梁宛書翰を見てみよう。実梁宛書翰は、6月13日（明治4年4月26日）付であり、これは、コミューン壊滅からほぼ半月後である。

二月初六日始て仏の巴里斯に入、方今ハ府下之学校ニ入塾いたし先以無恙勉強仕候間はばかりながら乍くだされまじく憚御顧念被下間敷候。（中略）欧州之光景段々在此地相探候得ば、本州にて考しとハ相違し各国之盛衰其評論頗多端なり。就中仏ハ昨年普に打負しより国内更ニ紛乱し、遂ニ解兵の時より事起り共和政治を名とし、姦猾無知之徒大ニ愚民を煽動し以干戈ヲ用にいたれり。政府ハ之を鎮定する事不能、却て此賊を避けベルサイユと云地に引移れり。賊ハ則巴里斯に拠政府を偽立し頗暴威を張る。是より政府両立之形となり日々砲声止ム時なく、万民之疾苦実に不可言。然ども賊ハ是れ多ハ各国浮浪之屯集、其暴行日々相益し人望尽ク去れり。 （『西園寺公望伝 別巻一』212・213頁）

コミューンは、「姦猾無智之徒」が「共和政治」を名として「愚民ヲ煽動」して「偽立」した不法な政権（賊）であるとされる。また、「賊ハ是れ多ハ各国浮浪之屯集」であり、その「暴行」の結果、人望も失っているとしている。このような西園寺の認識は、パリ・コミューンの実態とはかけはなれたものである。当時のパリの総人口の1割以上にのぼる20万人といわれるコミューン派が戦闘員としてヴェルサイユ軍と戦ったのである（「血の週間」といわれるヴェルサイユ軍による虐殺でコミューン派の死者はおよそ3万人にのぼる、また投獄された者は4万5千人近くいる）。コミューン成立の背景には多くの市民の支持があったことは疑いない。パリ市民にとっては、コミューンこそが正統政府だったのである。

しかし、第二帝政以後の政治過程について、渡仏前のアメリカ滞在中に多少の情報は入手していたとしても、西園寺が十分に理解しているはずもなかった。事実遺された史料を見る限り、

渡仏以前にはフランスの内情については簡単な記載しかない。ましてや、コミューン政府成立の政治的背景や内部における党派的な葛藤と混乱などほとんど理解不能であったであろう。『西園寺公望伝 第一巻』は、「賊と政府の色分けだけで事態の是非を判断した西園寺が、まだ基本的には尊攘派公家の単純な眼孔から物事を見ていた」<sup>4)</sup> という指摘する。

西園寺にとって維新変革は、支配層の宮廷内クーデターによる政権奪取であり、国民を念頭に置いたものではなかった。その後の戊辰戦争もまた支配層内部の抗争であり、民衆は西園寺の意識のはるか外にあったというのが実態であろう。戊辰戦争中の民衆運動には「ええじゃないか」や世直し一揆などを挙げるができるが、政治的目的も持たず、「ええじゃないか」の祝祭空間で狂喜乱舞する民衆の姿は西園寺にとってまったく評価に値しない、むしろ嫌悪すべきものであったであろう。西園寺の目には、敗戦とその後の混乱という政治的危機を無視して、コミューンの祝祭空間のなかで熱狂するパリ民衆の姿は「ええじゃないか」や世直し一揆と重なって映っていたのではなかろうか。戊辰戦争を経験したとはいえ西園寺はあくまで尊攘派の公家であり、民衆による共和政治など最初から正当性も持たないものと認識されていたのである。そうした西園寺の眼には、パリ市民の支持のもと成立したコミューン政府は政治に混乱と無秩序をもたらす害悪としか映らなかつたであろう。また、重要な情報源であった渡のフランスの政情に対する観察や民衆観は西園寺の意識を大きく規定していたといえよう。そこには、「賊と政府の色分けで事態の是非を判断した」ということも事実であろうが、同時に西園寺の民衆観・政治観というより大きな問題が潜んでいるといえよう。

さらに西園寺の筆は続く。パリ・コミューンの壊滅と「血の週間」は次のように報告されている。

政府ハ旧将マクマホンと云人を拳惣督に命し遂ニ三月下旬大挙して巴理斯ヲ襲エリ。当日之紛擾蓋前古未有という。砲丸ハ如雨市街ニ迸飛し処々放火、黒烟天地を包容し老少路頭に却叫し子を失者あり。親を遺者あり。或ハ盜賊之に乗し其光景非筆紙可尽矣。然ども人心之帰向する也、政府兵巴理斯に入也否是迄賊兵之為メ圧服されし府下之住民我も々と携砲賊ニ向ふ。其光景も亦盛なりし。既而政府之方大ニ打勝賊共敗走す。政府之兵則四方ニ散テ放火を救、賊を捕ふ。捕れハ則尽ク是を誅す。其屍路頭に横れり。欧州にハ珍敷愉快之所置なり。此戦凡三数日にて全平定すと雖仏国古来之宝品書籍多分焼失すと云。

(「橋本実梁宛書簡」『西園寺公望伝 別巻一』、212頁)

マクマホン麾下の軍隊は、普仏戦争で捕虜となっていたもの(『籠城日誌』には、セダンにおけるナポレオン三世の降伏とともに、「左翼の将帥マクマオン傷き、数万の死傷及四万の兵皆俘虜とな」ったことを記している)を、コミューン鎮圧のために、ティエールがビスマルクに要請して解放してもらった正規軍である。コミューン軍とは比較にならぬ装備を持ち訓練が施されている。5月21日パリに入城し、28日にかけてコミューン軍の激しい抵抗を排除し、パリを征服したが、その際の「賊兵」の死者は3万人、逮捕者は4万5千人近くにのぼった。ヴェルサイユ政府側の死者は1千人に過ぎない(血の週間)。圧倒的な軍事力の下で大虐殺がおこなわれたのである。ヴェルサイユ軍のコミューン派に対する憎悪がむき出しになったこの虐殺に対する西園寺の感想は、「欧州にハ珍敷愉快之处置なり」である。「賊共」が討伐されたことに快



哉を叫んでいるのである。戊辰戦争全体の戦死者でもせいぜい1万人程度ということを考えるならば、比較にならぬ大戦闘がおこなわれ多くの犠牲者を出している虐殺に、この反応は異常というほかはない。「賊」に対する憎悪は西園寺も共有していたといえよう。

西園寺はさらに、フランスが内戦にいたった理由として、「抑近日欧州之風儀開化ニ過キ繁華に流れ、殊ニ巴里斯ハ欧州ノ中央にして奢侈を極メ其人情之浮薄なる」ことをあげている。文明の結果としての奢侈と人情の浮薄が今次の内乱の根本要因であるというわけである。このような観点は、先述した渡の西欧文明観をそのまま受け継いでいるといえよう。

ところで、こうして奢侈と浮薄な人情が内戦の理由とされるならば、コミューン成立の必然性について、政治的・経済的原因を追及するというより根源的な考察はなされえない。結果として、こうした状況を引き起こさない方策は、日本に引き寄せて考えるならば、民衆に「皇国の節義」（忠君という伝統的な価値観）を教え込むことに収斂される。一方ヨーロッパにおいては「実ニ天運之循環する人力之不及とて今十年を出ずして欧州之一大変革する鏡に掛テ見如し」と将来を予見する。そして時局を収集するのは、「此時に在て第一世拿破烈翁之如き大英雄之出在救正する非んバ豈能是ヲ改正せんヤ」という大英雄である。洋学的知識人は、早くからナポレオンに注目しているが、幕末期にはナポレオン英雄論は日本でも流行している。西園寺もそうした知識を持っていたのであろう。大英雄のみが国内の分裂を收拾しヨーロッパを変革させるのである。英雄が歴史の主役であり、民衆は傍観者もしくは英雄に支配される存在にすぎない。ここには、のちの自由主義者、政党の領袖としての西園寺のイメージは全く存在しない。逆に、「望一伏て考る。此後若洋行して学問成就し帰る者あるも決て大ニ不可用。先之ヲ小吏ニ命篤ク議論を索り万一共和政等をとのふる者あらバ一々斬首して天下ニ示ベシ。而天下之方向を定、且刑法ヲ嚴ニして威ヲ立に非んバ徒に洋学生などを頼ミ何を以国家を保護せんや。第一之急務是なり。」ともいう（『自伝草稿Ⅰ』『西園寺公望伝 別巻二』、7頁）。西洋かぶれた洋行帰りの共和主義者は斬首せよ、という乱暴な結論は、極論とはいえ、この時期の西園寺の見方を示しているといえよう。それは、共和制と王制（天皇制）の矛盾という、いわば理論的観点からの共和制に対する批判というよりも民衆の政治参加に対する本能的・感情的な嫌悪感の表出とでもいうべき主張であり、「尊攘派公家」としての西園寺の意識がそのまま表現されているといえよう。

また、「自伝草稿Ⅱ」では、パリ・コミューンの成立事情を説明している。ティエールの命によって、モンマルトルの丘にあった大砲（パリ市民の醸出によって鑄造されたもの）を「政府ニ納ル、」ため、政府軍兵士が派遣されたが、市民が蜂起しこれを阻止した。「其勢ヒ、甚猙獰」であり、政府軍の将校が射殺されている。この結果、ティエールはヴェルサイユに逃れ、権力の空白状況の中で、パリ・コミューンが成立した、というものである。政府軍はプロシアとの講和条約締結後、休暇をとるなどして（事実は多くがプロシア軍の捕虜となっている）パリは軍事的にも空白だったため、「彼ノ兇暴ノ徒ハ、時ヲ得テ其志ヲ逞フ」して「(チエル氏らの)家ヲ毀チ財物ヲ掠ム」などの暴行を働いた。その後、政府軍の充実とともに、マクマホンが指揮してパリに侵入し、コミューン政府を打倒したが、その際、「暴大ニ敗ルト雖モ敢テ屈セズ益窮鼠ノ勢ヲ為シ所々市街ニ出没シ或ハ放火シ或ハ発砲シ老ヲ殺シ幼ヲ屠リ最モ其惨毒ヲ極

ム当時予ノ寓居モ亦一戦場ニ係ル飛丸雨注煙燭昼暗シ如此モノ凡八数日」(いわゆる「血の週間」)という事態が起った。またその結果、「帝宮、町奉行処、司法省、大蔵省、ハレイロハイヤル、王殿、王法議事院、大文庫、其他、有名ノ建物、尽ク焼土トナル、為ニ失スル所ノ書籍、宝器ノ類、豈惋惜スルニ堪エンヤ」という(「自伝草稿Ⅱ」『西園寺公望伝 別巻二』、12頁)。

追い詰められたコミューン派がパリ市内で放火をしたことは事実であるが、「老ヲ殺シ幼ヲ屠」ったのは、むしろ政府軍側である。西園寺の目には、3万に及ぶコミューン派の犠牲者は、政府軍ではなくコミューン軍によって虐殺されたと映っているのであろうか。また、さまざまな文化財が「焼土」となったことも事実であるが、一方的にコミューンの責に帰すことはできない。ここでも、コミューン側の暴虐と不法性、逆に鎮圧した政府軍の正当性がことさらに強調され、政府軍による虐殺の事実は全く無視されている。もっとも、「自伝草稿Ⅱ」では、「マクマホン、既ニ大捷ヲ得テ、巴黎ヲ回復ス、此時、人ヲ殺ス、殆ンド三万人ニ過ルト云、」(『西園寺公望伝 別巻二』、13頁)と続けている。実梁宛書翰に見られたような「欧州にハ珍敷愉快之處置」というあまりに激越な評価は下されていない。3万人の殺戮という事実を淡々と記しているのは、コミューンの正当性は認めないにしても、政府軍の残虐性に対する非難の口吻とも読むこともできる。事実を知ることによってこれまでの認識を修正した面があるのかもしれない。

いずれにして、パリ・コミューンを文明の恩恵を受けながら奢侈におぼれた浮薄な民衆が、多くの外国人を含む過激な共和派に煽動され賊政府をつくり正統政府に反抗したという枠組みで捉えていることには変わりはない。その意味では、如何にも尊攘派の公家らしい民衆観からの評価であり、政治観であるといえよう。『西園寺公望伝 第一巻』でも指摘されているが、「なぜコミューンが出現するにいたったのかという、当然の疑問が全く見られない。(中略)それを知ろうとする気配も察せられない」<sup>5)</sup>というのがこの時点での西園寺の限界であるといえよう。

### 三 『米欧回覧実記』にみる岩倉使節団のパリ・コミューン観

岩倉使節団が、パリに着いたのは、パリ・コミューンの崩壊(1871年5月28日)から、約1年半後の1872年12月16日である。パリには、翌73年2月17日まで、約2ヶ月にわたって滞在する。1870年夏にはじまった普仏戦争、ナポレオン三世の失脚と第三共和政の開始、敗戦とパリ・コミューンをめぐる動乱という激動からわずか1年半である。周知のように使節団の公式記録は『特命全権大使 米欧回覧実記』(フランスは第3巻。以下の引用は岩波文庫本により、『実記』と略す。なお、『実記』の表記は、統一に欠けるところがあるが、引用では、岩波文庫本に従って表記している)であり、彼らの訪問先に対する詳細な報告がなされている。コミューンについても数ヶ所言及されている。

仏國ノ政府ヲ共和ニ変セシヨリ、僅カニ二年ニ満タス、其憲法ハ当時協議中ニテ、未タ定マラス  
(『実記』、66頁)

憲法も制定されて居らず不安定な政情の下でのパリ滞在であった。政権を担っていたのは、パリ・コミューンの制圧に成功したティエールだった。ティエールは、すでに75歳、ルイ・フ

イリッパのオルレアン王朝で内務大臣、外務大臣を歴任したが、1841年スイスに亡命、第二帝政下では、共和派として名を馳せ、普仏戦争中から「今度普軍攻圍ノ際ニ、内国防護ノ政府ヲ立テタルトキ、大統領ニ公挙セラレタリ、去年ノ春、普軍ニ和ヲ講シテ、其兵ヲ退ケ、償金ヲ辨償スル等ノコトヨリ、加フルニ巴黎暴徒ノ鎮定ヲ以テシ、国家艱難ノ際ニ尽力シ、「ヴェルサイル」ニ議院ヲ開キ、国憲ヲ制定シ、巨額ノ償金ヲ募リ、并セテ国内ノ利益ニ、退歩ノ態ヲ生セシメスシテ、国脈ヲ維持シ、進歩ノ機ヲ誤ルニ至ラサルハ、当時此人ノ苦心營慮スル所ニテ、老練熟達ノ政治家ナリ、文学ノ士ヨリハ推服サルレトモ、仏国ニ党論多ク、兵隊激昂ノ際ニテ、非議スル者モ少ナカラス、実ニ仏国ノ艱難ナル厄運ニ際シタリ」（『実記』63頁）と、フランスの国家的危機に際して国家を維持し、フランス経済と社会の進歩をすすめた人物として高く評価している。もっとも、引用文中にもあるように、不安定な政情のもとで、王党派を中心にティエールの穏健共和制の立場に対する攻撃も激しく、73年5月には失脚することになる。なお、共和国憲法の制定は75年である。

この記事でも、パリ・コミュニケーションは「巴黎暴徒」であり、「鎮定」の対象とされている。また、73年1月1日には、新年の「賀祝」として、ヴェルサイユに赴いた記事においても、「兩國和成リ、普国軍ヲカヘシ、仏国今ノ大統領「チエル」君ヲ推立シ、共和政治ヲ建テ、政府巴黎ニ復センコトヲ議ス、時ニ巴黎府ニハ「レット、レポブリカン」ノ党（暴発ノ共和党、所謂「コムニユン」）、正ニ煽動シ、騷擾安カラス、「ボルトウ」府ハ西南ニ偏在シ、規模陋小ニシテ、全国ヲ控御スルニ足ラス、「チエル」君見ヲ定メ、「ウエルサイル」宮ニ政府ヲ設ケ、其「オペラ」堂ヲ以テ議院トナシタリ、爾後已ニ二年ヲ経タリ、「レットレポブリカン」党ハ巴黎ヲ乱妨スルコト、二月ニ及ヒ常ニ兵ヲ西シテ、「ウエルサイル」ヲ襲撃センコトヲ謀リタレトモ、政府鐵路ヲ絶チ、道路ヲ塞キ、「モンワレヤン」ヲ阻シテ、之ヲ掩圧ス、賊近ツク能ハス、諸道ノ兵集リ、一時ニ掩襲シテ、賊徒ヲ剿絶シタルハ、「チエル」君ノ本謀ナリ、」（『実記』、66頁）として、わずか20キロを距てたパリとヴェルサイユに二つの政府が対立していた状況を描くとともに、コミュニケーション軍のヴェルサイユ攻撃を阻止し、フランス全土から、さらにプロシアの捕虜となったフランス兵まで糾合してパリを制圧したのは、ティエールの「本謀」によるものであるとその作戦指揮を賞賛している。また、その人格については「短小ナル老翁ニテ、言容温温、和氣掬スヘシ」と描いている（『実記』、66頁）。

ティエールへの高い評価はパリ・コミュニケーションに対する否定的な見方の裏返しである。岩倉使節団もまた賊（パリの暴徒）と正統政府の対立という単純な二分法に立っていることは明らかである。

もちろん、岩倉使節団は西園寺とは異なり、ある程度の子備知識を持ってパリを訪問したはずである。また、在留日本人（留学生や政府・藩・民間から派遣された在留者、例えば、先述の西園寺公望や、渡六之助などは重要な情報源であったであろう）からさまざまな情報を得ていたことはたしかである。さらに、渡や西園寺とは異なり、実地の見聞に加えてフランス政府側からの説明などが、重要な情報源であったであろう。また、パリ攻圍下で書かれた『籠城日誌』や西園寺の書簡とは異なり、『実記』は帰国後の校訂を経ている。その意味では、生々しさに欠ける点があることは致し方ないことである。しかし、逆に校訂を経ることによって岩倉使

節団の観点や評価がより整理され強く表れている面もあるということができよう。

では、岩倉使節団はコミュニケーションをどのように評価しているであろうか。その評価はやはり手厳しいものである。

先ず、パリ・コミュニケーションそのものについては、すでに述べたように、パリの暴徒による乱という位置づけである。「乱」という言葉自体、正統政府に対する反逆者のイメージを持っていたことは明らかである。同時に、コミュニケーションを「一揆」と説明している。これは、当時の日本人向けの表現であるとともに、使節団のコミュニケーション評価を端的に示しているといえよう。

さらに、『実記』は、この「暴徒」の狼藉の結果、さまざまな文化財が破壊されたという。西園寺にも同様の記載があったが、ここではもっと具体的である。例えば、凱旋門は、プロシア軍がパリ攻囲中も「軍中ニ令シテ、此門ニ向ヒテ発砲スルコトヲ禁シ、圍城ヲ畢ルマテ、一点ノ疵モ負ハサリシニ、其後「コンミュン」ノ乱トテ、国内ニ一揆起リテ、政府ニ抗抵シ、府中ノ大乱トナリ、其時ニ民党ノ一揆トモ、此門ニ大砲ヲ上セテ砲台トナシテ、北ニ向ヒテ「ウェルサイル」「モンワレヤン」ヲ射テ拒戦ナシタル故ニ、政府ヨリ已ヲ得ス、砲ヲ打掛ケテ之ヲ攘ヒ退ケタリ、此時ニ北方ノ一面毀傷セルヲ以テ、当時ハ修覆中ナリケリ、」（『実記』、43頁）

文化財に対する敬意を持ったプロシアの正規軍に対し、コミュニケーション軍には文化財をも砲台として使うという野蛮さである。逆に政府軍からの砲撃は「已ヲ得」ざることとして正当化される。

「オフスセル、ウェルトア」（パリ天文台）の「フーコー」氏發明ノ望日鏡は「往時「コンミュン」ノ乱ニ、賊ヨリ小銃ヲ打掛ケ、乱妨ヲナシ、其弾丸ニ碎カレ、今ハ廢物トナリテ、壁ニカケタルアリ、前年仏国ノ乱ハ、普軍ノ禍ヨリ、「コンミュン」ノ禍ヒ尤モ猛ナリ、文明ノ国モ、中等以下ノ人民ニ至リテハ、尚冥頑ニシテ驚悍ナルヲ免レス、西洋各国、上下ニ通シ風俗美ナリト謂ハ、亦大ナル誤リナリ、」（『実記』、140頁）

貴重な文化遺産がコミュニケーションの手で破壊されたというのである。文明国とはいいいながら、開化しているのは上等以上の人民であり、「中等以下ノ人民」によって組織されたコミュニケーションは「冥頑ニシテ驚悍ナル」即ち無知頑迷で暴虐であるということがいやがうえにも強調されている。ここには、一方的な情報の結果であるとはいえ、コミュニケーションに対する強い偏見があると云わねばならない。

こうした評価はどのようにして生まれたものであろうか。先述したように、ひとつは、彼らの情報源の問題がある。渡にしる西園寺にしる、パリの民衆やコミュニケーションに対して反感を感じていたことはすでにみた。また、ヴェルサイユ政府からの説明もコミュニケーションの暴虐を強調し政府軍の正当性を弁証するものであったろうことは想像に難くない。こうした限られた情報源から岩倉使節団が最初からコミュニケーションに対する偏見を持っていたであろうことは容易に考えられる。だが、同時に彼らの使命感とも大きく関わっているのではなかろうか。

岩倉使節団は何を求めて米欧を回覧したのか。世界資本主義に従属的に組み込まれながらも、万国対峙を如何に実現するかが、明治政府の至上課題であった。西欧の富強は如何にして実現されたかを探り、それを明治国家において実現する方策を求めることこそが、岩倉使節団の使命であった。

幕末以来、西欧諸国の強大さの根本要因として、「一和」として表現される中央集権的な近代

国家という観念が存在していた。如何にして明治新政府のもとで「一和」を実現するのか。世界の最強国イギリスは議会制の最盛期である。西欧諸国はいずれも議会制を採用し市民階級をも政治に組み込むことによって富強な文明国として世界に君臨している。明治初期の日本において「一和」の実現こそが求められていたのである。議会制や民衆の政治参加はそのための手段と考えられていた。西欧諸国に近代化のモデルを探ることこそが、使節団の目的だったといえよう。ところが、列強の最も重要な一角であったフランス（明治初期には多くの軍人がフランスに留学している。これは、最強の陸軍国と認識されていたからである）がもろくも普仏戦争で大敗し、首都パリにまでプロシア軍が入城し、文字通り城下の盟を結ばざるを得なくなった。

使節団は、フランスには「一和」を妨げるさまざまな党派（帝制派・オルレアン王朝派・急進共和派・穏健共和派・正統王党派など）の存在があり、ナポレオン三世敗北後（セダン攻囲戦での降伏と退位）の政治的混乱がそれに拍車を掛け、その結果城下の盟という屈辱を余儀なくされたとの認識と当然持っていたはずである。いわば「一和」を妨げるものとして、民衆を組織し、政治的主張を展開する党派が認識され、そうした党派抗争を認めるような政治形態＝共和制に対する批判的な意識を使節団は最初から持っていたのではなかろうか。就中、コミュニケーションは、国家の非常時に下層民を煽動し、フランスの「一和」を妨げる存在と看做されたといえよう。当然のことながら、岩倉使節団においても、コミュニケーションの成立と意義を政治経済的な要因から客観的に評価する視点はなかった。

### おわりに

以上、渡・西園寺・岩倉使節団と三者のバリ・コミュニケーション観を瞥見したが、いずれもコミュニケーションを「賊」・「乱」・「一揆」など、鎮圧の対象とみている点は同じである。また、渡や西園寺には、欧米文明を節義のない軽佻なものとして、そこにコミュニケーション成立の原因を求めるという姿勢が共通している。

しかし、岩倉使節団には、別の民衆観もある。コミュニケーションを乱ととらえながらも、コミュニケーション最後の激戦地パール・ラシェーズ墓地では、「此墓地ハ、去年「コンミュン」ノ乱ニ、「コンミュン」ノ党、此ヲ占メテ屯營セルヲ、政府ノ兵、前後ヨリ回り出テ、烈戦ヲナシ、此墓間ニ於テ、三百余人ヲ屠殺セリ、其時紅血漂ヒ流レテ、墓中ナル大路ノ坂ヲ混混（ママ、滾々、引用者）トシテ流レ下リ、屍ノ丘ヲ築キヌ、此ヲ「コンミュン」ノ乱ノ畢リナリトスルト、新戰場ノ語ヲキキ、人ヲシテ竦然タラシメヌ、」（『実記』、82頁）という感想を漏らしている。「三百余人ヲ屠殺セリ、其時紅血漂ヒ流レテ、墓中ナル大路ノ坂ヲ混混トシテ流レ下リ、屍ノ丘ヲ築キヌ」という言葉には、家畜同様に虐殺された人々に対する憐憫もみられるのではなかろうか。「人ヲシテ竦然タラシメヌ」という感慨も、単に恐れおののいているという意味ではあるまい。パリの人々をそこまで追い詰めた政治の在り方に対する批判もくみ取れはしないだろうか。なぜなら、普仏戦争後のフランスの復興は、フランス政府ではなく、フランス国民の力によるものだという認識も存在するからである。

『実記』は普仏戦争後のフランスの逸早い復興について次のように述べている。

去年以来、世ノ耳目ニサヘ落胆セル、巨額ノ償金ヲ、日耳曼ニ払イ入レルコトヲ約シ、之

ヲ辨償スルニ、内国ノ生意ヲ低衰スルコトナキハ、英国ノ人モ、意外ト驚キ、日耳曼ノ宰相「ビスマルク」氏モ、一生ノ大失策ナリト浩嘆セルニ至ル、其国債ヲ内外国ニ償エルトキニ当リ、貸主ハ常ニ先キヲ争フテ輻輳シ、券面ノ数ヨリ、常ニ超過シ、往往ニ貸期ニ遅レタルヲ失望セルモノ多カリシト云、  
 (『実記』、75頁)

では、この逸早い復興を可能にしたのは何か。

而テ内国ノ紙幣ニ、些ノ下落ヲ招キシマテニテ、貿易ノ利、屈折スル所ナク、国ニ窮困ノ情ヲアラハスコトナシ、政府貧ナレトモ、民皆富ム、全国依然トシテ生理ヲ進ム、私人困テ謂フ、国ノ貧富ハ、政府ニ財ヲ蓄フノ豊歉ニアラス、人民ノ貧富ニテ定マル、日耳曼政府ニ金礦ヲ積メトモ、全国ノ民ミナ貧ナリ、故ニ金礦民手ニ落レハ、乃流レテ仏国ニ帰ル、九億万ノ価値ハ、之ヲ仏ノ政府ヨリ出シ、日国ヲシテ債ヲ我仏民ニ償ハシムルノミ、七年ヲ出スシテ、全額仏ニ返償スヘシト、此国ノ財多キト、人傑多キトハ、実ニ欧州ノ精華ト謂フヘシ、  
 (『実記』、34頁)

ヨーロッパの現状は、一方では、国際法による国家主権の尊重と国家間の平等を掲げつつも、現実には弱肉強食である。その中で国の独立を守るために各国は、「胃紐ヲ緩メズ、(中略) 各国ノ気ヲ張り志ヲ厲シ、駸駸富強ニ競進」している(『実記』、116頁)。強大な軍事力を維持するには豊かな経済力が必要である。この豊かな経済力は、政府の財政的豊かさではなく、国民の財力・豊かさによって定まるものである。敗北し内戦を経た国でありながら、わずか1年半で復興を成し遂げたフランスは「此国ノ財多キト、人傑多キトハ、実ニ欧州ノ精華ト」称えられる。

パリの豊かさに幻惑されつつ、それを実現したフランス資本主義と国民の底力に驚嘆しているのである。岩倉使節団は、民衆を単なる抑圧の対象としてみたのではなかった。富強を実現する原動力と見たのである。ボナパルティズムといわれるナポレオン三世の社会事業や労働者政策などに高い関心を示すのも、そうした観点と無縁ではあるまい。コミューンの主体を下層貧民と見た岩倉使節団にとって、いかにして下層貧民の不満を解消し、国家に忠誠な国民としていくのかが、「一和」の実現にとって不可欠の課題となったといえよう。

## 注

- 1) 私が所持している資料は、再刊本の『巴里籠城日誌』(以下、『籠城日誌』)であるが、国会図書館蔵『法普戦争誌略』(国会図書館デジタルライブラリー)と比較し、内容は同一である。本稿の引用はこの大正3年9月の再刊本による。なお、『籠城日誌』では、漢字にはすべてルビをふっているが、繁雑にすぎるので、一部を除きつけなかった。また、他の史料についても、適宜ルビを抄略、もしくは付加している。
- 2) 「レスヒオ氏」とはその後も親交があり、パリ防衛戦を陣地で指揮する「レスヒオ氏」を訪ね、観戦するとともに、戦況を訊いたりもしている。私費留学生である渡にとって最も重要な情報源の一つであったと思われる。
- 3) 2月7日とする資料もあり、いずれが正しいか判断しかねる。ここでは、そこまでの厳密性は必要なかろう。
- 4) 『西園寺公望伝 1』(1990年、岩波書店)、214頁。
- 5) 同上、218頁。